

研修生から非正規労働者へ ——なぜベトナム人研修生は「失踪」するのか——

ダニエル・ベランジェ（ウエスタン・オンタリオ大学）／上野加代子（徳島大学）／クアット・チュ・ホン（ハノイ社会開発研究所）／落合恵美子（京都大学）

聞き手：なぜオーバーステイしなかったのですか？

プオン：残って仕事をするよう頼む人はたくさんいました。でも、多額の保証金を没収される恐れがあり、両親の評判も悪くなると思ったのです。

来日する研修生のほとんどは、上で登場したベトナム人研修生プオンのように出身国で課された保証金やしがらみゆえに、「失踪」せず帰国する。だが、少数ではあるが帰国せず日本に残って働き続ける者もいる。大きく分けると、渡日して数ヶ月でなくなるパターンと、3年たってそのまま残るパターンがある。だが、「失踪」は当の本人にとっても簡単にできることではない。非正規滞在になるストレスだけでなく、強制貯蓄や保証金を失うリスクも負うことになる。それが「失踪」を防止する制約になっているわけだが、それにもかかわらずなぜオーバーステイの道を選ぶのか。以下では、日本での研修経験を持つベトナム人13名に対する現地調査をもとに、この問いに答えていくこととする。

◆「失踪」させないシステム

保証金を含め渡航前に必要な費用は、アジア全体のなかで日本が一番高い。それでも渡日する人がいるのは、日本が最高の収入と労働条件を提供すると考えられているからである。それに、「研修生」として稼ぎつつ将来に向けた研修を受けることが、一石二鳥としてアピールする。だから、日本の仕事は地元の有力者や親戚などのコネによって紹介されることが多く、紹介してくれた人に恩義を感じて旅立つことが多い。

だが、そうした希望通りの職場が待っていることはない。にもかかわらず「失踪」する率が低いのは、まずもって契約に違反すると約6千ドルに上る保証金を返してもらえないことによる。それに加えて、日本での仕事を紹介してくれた人の顔に泥を塗らないように、文句を言わずおとなしく仕事をするしかなかった。帰国後も、紹介者を慮って自らの辛い経験については口を閉ざしてきたのである。

私は3年間日本で働きました。両親が私にバイクを購入するように云いました。私はそれを断りました。けれども、バイクは私達の評判を保つのに役に立つというわけです。私が外国へ行った時、多くの人々は私が大金を稼ぐとっていました。人々は私がどれほどのお金を稼ぐか知らず、私がどれほど厳しく働かなければならないかも気にしていませんでした。だから、私の両親も私ももし私が自転車で働きに行くのと恥をかくのです。結果として、両親はバイクを買うために借金をしました。私は私の友人ほどに幸運ではありませんでした。あの人たちは私よりもずっと沢山の金を——2倍ないしそれ以上稼ぎました。私は運が悪かったのです。

◆ドゥオンの経験——負債がもたらす「失踪」

負債は確かに「失踪」防止策として機能しているが、負債ゆえに「失踪」を選ばざるをえなくなることもある。渡航に必要な費用を調達する際、家族・親族の土地を抵当にして高利の借金をする。その利息は、日本にいる間にも毎月の仕送りで払わねばならないが、研修生の賃金が低すぎて仕送りできない場合、保証金を無にしてでも「失踪」したほうが賢い選択となる。

そのなかの1人であるドゥオンは、2000年に渡日する際に8千ドルを費やした。彼は研修生として4ヶ月間働いただけで「失踪」している。研修生でいられればそれでもよいが、研修生ではお金が残らなかったからである。彼の正式な月給は12万円だが、そのうち4万円しかもらえなかった。住居費と家具のレンタル代で4万円が天引きされ、さらに4万円が強制貯蓄されていた。食費などの生活費を使ってしまうと、月末には家に送金する金も残らなかった。おまけに期待していた残業もなかったため、友人の提案にしたがって「失踪」したのである。高い保証金は研修生を縛るためのものであるが、そのために高い利子を払わねばならないことが、より稼げる非正規就労へと研修生を駆り立てる側面もある。

◆リンの経験——安すぎる報酬による「失踪」

ドゥオンと同様に、手元にお金が残らなければ帰るに帰れないことを示すのが、リンの経験である。彼女は6年以上日本にいた。最初の3年間は研修生として働いていたが、勤務先が次々に倒産したため、研修生のまま職場を渡り歩く羽目になった。そこでもらえるのは、給料というよりは小遣い程度のものでしかない。リンは次のように語っている。「3年たって帰国したかったのですが、十分なお金がありませんでした。会社が倒産し、3回も職場を変えさせられました。会社から払われるお金も月4万円で、ベトナムでは高く見えても日本ではタダ働きみたいな額でした。…帰国に備えて貯蓄するどころか、渡航時の借金も十分支えなかったのです」。

我々は韓国、台湾、マレーシアからベトナムに戻った労働者の質問票にもとづくインタビュー調査もしており、その違いは以下の表のようになる。表からもわかるように、渡日組は強力なコネを使うだけでなく借金の額も多いため、故郷に錦を飾らねばというプレッシャーがひときわ強い。日本で失踪した者は、単に労働条件が劣悪だとか高賃金を求めるといった理由ではなく、成功せずおめおめと帰国できないという構造的条件にも規定されているのである。

表 ベトナム人帰還移民の行先別比較

	日本	台湾	マレーシア	韓国
高等教育比率	63.3	25.0	18.1	34.9
若年層（20-29歳）比率	60.0	23.5	37.3	22.3
独身者比率	43.3	9.6	20.5	13.6
女性比率	46.7	67.6	31.3	15.5
工場労働者比率	86.7	22.8	76.7	64.1
平均滞在月数	44.0	33.4	34.5	48.6

平均渡航前費用（米ドル）	10,640	2,077	1,520	4,038
回答者数	30	272	249	105

◆結論

本稿では、研修生がなぜ「失踪」して非正規滞在になるのかをみてきた。そこで浮かび上がるのは、魅力的な職場とされる日本の評判とは裏腹の劣悪な労働条件と、郷里での期待で板ばさみになる研修生の姿であった。マレーシア・台湾行きは一種の賭けのようなものだが、韓国・日本行きは高い出費に見合う報酬を得られる安全な投資とみなされる。

少ない手取り、職場の倒産、契約打ち切り、残業のない職場といった形でこうした前提が崩れるとき、研修生たちは「失踪」するしかない状況へと追い詰められる。非正規滞在者の労働市場は、確かにリスクを伴い労働条件も悪く、長時間労働になる可能性があるが、研修より賃金は高い。借金を返して貯金を増やすべく、ベトナムにすぐにでも送金しなければならない労働者にとって、非正規滞在になることは——さまざまなリスクを勘案しても——魅力的な選択肢なのである。

（付記）本稿は次の論文のダイジェスト版である。 Daniele Belanger et al. "From foreign trainees to unauthorized workers: Vietnamese migrant workers in Japan," *Asian and Pacific Migration Journal*, 2011, March.